

小学校体育授業における児童の実態に応じた効果的な ICT の活用法

－SAMR モデルとの関連性をふまえて－

橋本 将汰（宮崎大学）

1. 目的

本研究は、ICT 活用の機能的な分類と、ICT 端末を活用した授業実践を通して、体育授業における児童の実態に応じた効果的な ICT 端末の活用法を検証することを目的とした。

2. 研究方法

ICT 活用法の機能的分類をするにあたり、体育授業と ICT に関する書籍や論文に記載されている ICT 活用法を ICT 活用のレベルを示す SAMR モデルに分類し、SAMR モデルを基にまとめた活用法の一部を抽出し、学習の流れに沿った活用モデルを作成した。また、ICT を活用したマット運動の授業実践を量的・質的に分析し、ICT の効果的な活用法を検証した。

- 1) 対象者：小学校第3学年（35名）
- 2) 量的分析方法：情意・認知的側面は、よい授業への到達度調査（小林，1980）で、技能的側面は、技能の伸びで分析した。
- 3) 質的分析方法：技能に伸びが見られた児童3名と見られなかった児童1名を抽出し、個の学びのプロセスの特徴をおさえた。

3. 結果と考察

(1) 活用モデル

表は、ICT 活用のレベルを示す SAMR モデルの分類を基に整理した個人的運動における活用モデルである。すなわち、縦軸に学習活動、横軸に初期・後期・発展と活用レベルを設定し、どのような使い方ができるのかをまとめたものである。

(2) 授業分析

①情意的側面

よい授業への到達度調査における、情意的側面の好意的反応比率は、単元を通して全時間 95%以上という高値を示した。よって児童は、本単元を通して楽しみながら精一杯運動に取り組むことができた と推察された。

表. ICT の活用モデル

	個人的運動		
	A（初期）	B（後期）	C（発展）
めあての確認	大型モニターでねらい共有	タブレットで意見共有	テキストマイニング
課題解決	動きをタブレットで撮影	自動的にグラフ作成	VR で運動感覚の獲得
話し合い	2つの動画比較、動き分析	動画を共有し話し合う	複数の動画を組み合わせる
ふりかえり	アプリでふりかえり記入	ネット上で相互にコメント	動画や画像を掲示板に投稿

②認知的側面

ICT 活用に関する児童の学習カードを分析すると、学びの対象が自己から他者へと変化していた。したがって、ICT を通して児童は、技能追究への欲求が、自己の技能追究から他者と学ぶ良さの実感へと変化したと推察された。

③技能的側面

全児童の技能の伸びをまとめると、ほとんどの児童において、技能レベルが高いレベルで維持・向上していることが明らかとなった。

④抽出児の質的变化

技能に伸びが見られた児童らは、ICT を活用し、自己の課題に対する適切な解決方法を認識したうえで運動に取り組んでいた。一方、技能に伸びが見られなかった児童は、自己の課題に対する適切な解決方法を認識できていなかった。

4. 結論

ICT 活用について、児童の活用レベル・授業の場面に応じて使い分ける必要性が示唆された。また、効果については、メタ認知による自己の課題の客観的把握と、技の特性や構造の理解を促し課題を明確にする、の2つが明らかとなった。

【参考文献】

小林篤（1980）体育の授業研究，大修館書店，pp. 224-258.